タイ海外豆類事情調査結果の概要

（公財）日本豆類協会

（公財）日本豆類協会では、平成８年から関係国における豆類の生産・流通・消費の状況を始め、農業、食料、社会、経済などの動向を現地で調査して参考となる情報を収集し、豆類関係業界の関係者の皆様にご提供することを目的として、海外豆類事情調査を毎年実施してまいりました。

今回は、タイを調査対象国として選定し、令和２年２月16日から２月23日までの日程で現地調査を実施いたしました。タイでは北部、東北部、中部などで大豆、落花生、ササゲ・インゲン類をはじめ、多くの豆類が生産されていますが、これらの多くは基本的には国内市場向けであり、日本には、竹小豆、いんげん、ささげ等の乾燥豆や加糖餡が輸出されているものの、数量的には限られています。その一方で、ここ数年においてはタイの小豆の生産・流通の状況に変化があるとの情報もあるところです。

こうした状況を踏まえ、タイにおける主要生産地を実際に訪問し、豆類の生産、流通、消費等に関する事情調査を実施いたしましたので、その概要を御報告します。

１．調査団構成

	名　　前	所　　属
団　長	梶原雅仁	全国穀物商協同組合連合会 常務理事 （株）丸勝 代表取締役社長
副団長	光武信雄	全国甘納豆組合連合会 副会長 光武製菓株式会社 代表取締役会長
団　員	永田大輔	雑穀輸入協議会 日昌物産株式会社
団　員	本郷　徹	ホクレン農産事業本部 農産部雑穀課長
団　員	飯田健雄	公益財団法人日本豆類協会 企画調査部長

２．調査日程

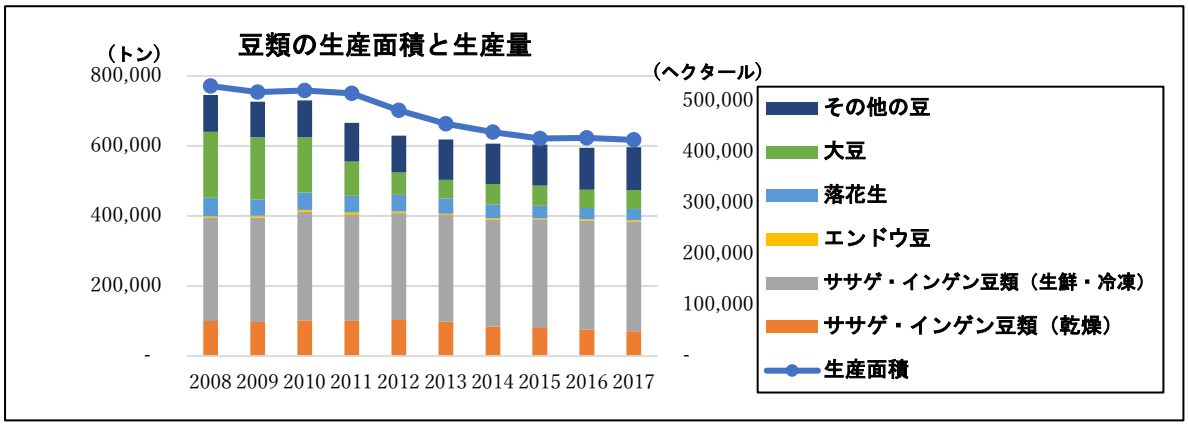
日程	場所	交通手段	活動
2 月 16 日（日）	バンコク着	航空便	羽田発→バンコク着
2 月 17 日（月）	バンコク	専用車	農業協同組合省農業普及局 JETRO バンコク事務所 在タイ日本大使館
2 月 18 日（火）	バンコク	専用車	トウモロコシ及び農産物取引協会 タラート･タイ卸売市場 BIG C スーパーマーケット オートーコー市場
2 月 19 日（水）	バンコク チェンマイ	航空便 専用車	バンコク発→チェンマイ着 チェンマイ畑作物研究センター 王室プロジェクト財団ショップ
2 月 20 日（木）	チェンマイ	専用車	ムアン･マイ（ニュー・シティ）市場 王室プロジェクト財団 パン･ダ農業ステーション
2 月 21 日（金）	チェンマイ	専用車	王室プロジェクト財団：農産物集出荷場 民間農産物加工所(LIMSAKDAKUL)
2 月 22 日（土）	チェンマイ バンコク	航空便	チェンマイ発→バンコク着 バンコク発→
2 月 23 日（日）	羽田着		羽田着

３．調査結果の概要

(1) タイの豆類生産の概要

タイでは北部、東北部、中部などで大豆、落花生、ササゲ・インゲン類の豆類が生産されています。これらの多くは国内市場向けで、米、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビなどの主要作物に比べて生産量は少なく、米やトウモロコシとの輪作が大半です。

なお、2017 年の大豆、落花生、エンドウ豆、ササゲ・インゲン豆類、その他の豆類の合計生産面積は約 40 万ヘクタール、生産量は約 60 万トンとされており、近年は減少傾向にあります。

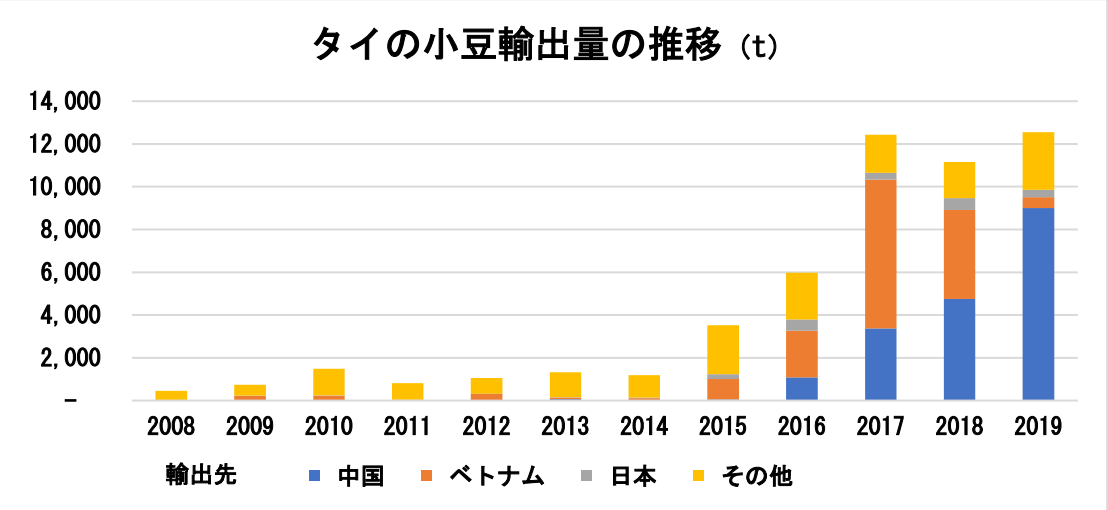


（参考 1）タイの小豆生産の概要

小豆はタイの戦略作物ではないことから、栽培面積、生産量等については統計資料がなく、明らかになっていません。

しかしながら、プミポン前国王によりタイ北部のケシ栽培撲滅と山岳民族の生計向上支援を目的として設立された王室プロジェクト財団（Royal Project Foundation）では、新規導入作物として小豆に興味を持っていることから、タイ北部山岳部での栽培を増やすための試験研究や技術普及、種子配布等に取り組んでいます。また、王室プロジェクト財団直営のショップでは、小豆の乾燥豆やあんこ、さらには小豆入りアイスを販売するなどして小豆の消費拡大を図ろうとしています。

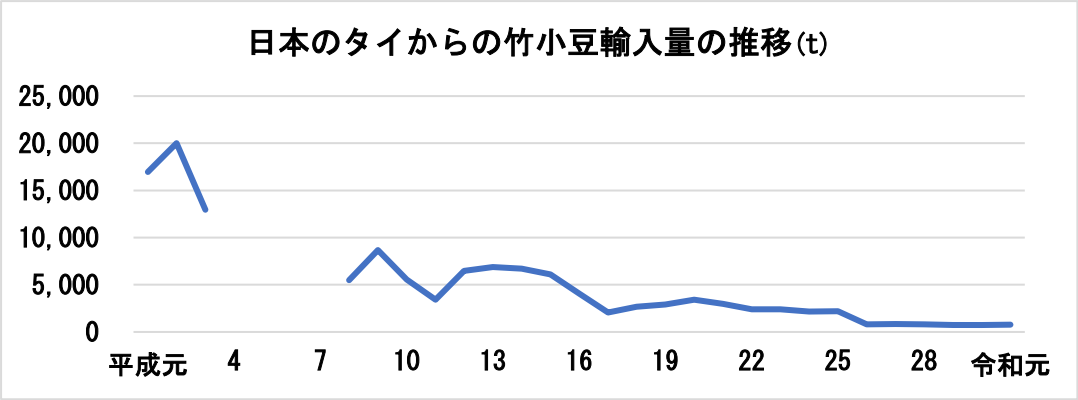
一方、ここ 10 年程度のタイの小豆の対外貿易量をタイの通関統計からみてみますと、2008 年の小豆輸出量は 450t であるものの、その後は急激に増加傾向をたどり、2014 年:1,190t、2015 年:3,530t、2016 年:5,980t、2017 年:12,440t となっていることが分かります。

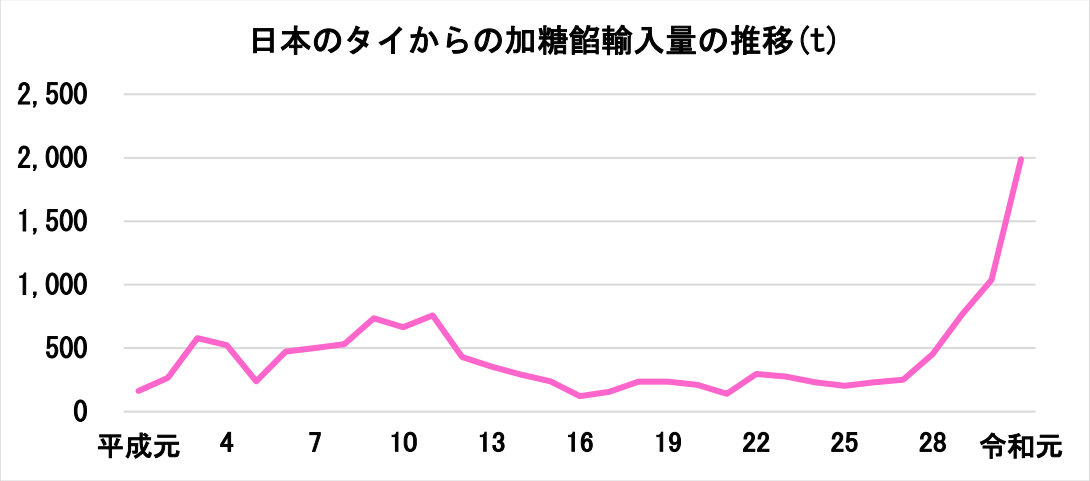


（参考 2）タイと日本との豆類に関する貿易関係

我が国のタイから豆類の輸入量の推移を平成元年からみてみますと、当初は竹小豆に関しては、タイが我が国にとっての重要な輸入先でありましたが、その後タイからの輸入量は急速に減りました。

一方、タイからの加糖餡の輸入に関しては、平成 28 年頃から急激に増加し、現在もその傾向が続いていることは注目に値します。





(2)現地調査の概要（主な訪問先）

1)２月１７日（月）：バンコク

【農業協同組合省農業普及局（豆栽培の説明）**】**

農業普及局で試食した
緑豆で作った甘い菓子

① タイの農業は米作中心で、豆類については米の裏作として栽培されていますが、米やトウモロコシに転換する農家も多く、今では豆類の自給率は２％に過ぎません。

② 小豆は、かつてタイにおいてゴムの木との混作で栽培されていましたが、今ではあまり栽培されなくなりました。小豆は餡にして食べられていますが、タイではあまり人気がありません。

③ 一方、タイでは緑豆を砂糖と甘く練った餡で菓子を作って食べる習慣があり、国民に広く親しまれています。

2) ２月１８日（火）：バンコク

【タラート・タイ市場】

① タイで一番大きな２４時間オープンの市場で、全国から商品が集まってきます。豆類に関しては、そのほとんどが国産のようであり、卸売りだけでなく小売りも行われています。

② 赤インゲン豆（red kidney bean)、黒インゲン豆（brack bean）等のインゲン豆を中心に、500g の袋詰めの状態でうず高く積まれて売られていて、価格は、500g 袋 30 バーツ（110 円程度）です。なお、量り売りも行われていました。

【オートーコー市場】

① タイの富裕者が訪れる高級な果物や野菜を豊富に販売している小売り対応の市場です。

白花いんげんの甘納豆

② 緑豆の美しい菓子の外、中国製の白花いんげんを甘く煮たものも売られていました。価格は、およそ 200g～300g のパックで 100 バーツ（360 円）程度でした。

【タイ国トウモロコシ及び農産物取引協会】

① 当協会は 60 年以上も前に設立されたもので、110 の構成員で成り立っています。トウモロコシ、米、タピオカといった農産物の輸出業者、売買業者等がメンバーになっています。

② 彼らによりますと、豆類は、おおむね北部地域で作付されていて、播種期は 7 月から 8 月、収穫は 10 月から翌年の 2 月までですが、昨年は 40 年ぶりの厳しい干ばつに見舞われたこともあって、最大 70～80%の減収になると予想されています。

農産物取引協会から入手したタイ国内の豆類流通価格（/kg）

小豆	50 バーツ(180 円)	緑豆	30 バーツ(108 円)
竹小豆	43 バーツ(155 円)	ササゲ	32 バーツ(115 円)
黒インゲン豆	40 バーツ(144 円)	赤インゲン豆	40 バーツ(144 円)

3) ２月１９日（火）：チェンマイ

【チェンマイ畑作物センター（国立農業試験場）】

① 当センターは大豆の研究が主たる業務ですが、緑豆の研究もしています。また、タイ北部地域でどのような作物が適しているのかを調べる研究も実施しています。

② 一方、小豆やいんげんに関しては、現状では研究は行っていませんが、種苗保全（遺伝資源保全）のために少量の栽培を当センター内で継続しています。

小豆の種子保存用の圃場

【王室プロジェクト財団ショップ】

① 北部タイ山岳部の少数民族対策として王室プロジェクトが実施されていて、その一環として台湾品種の小豆栽培が行われています。

② ここでは王室プロジェクトで栽培された小豆が 40 バーツ（140 円）/500g で販売されてます。餡子も真空パックで、105 バーツ（380 円）/500g で販売されています。

ショップ販売の小豆とインゲン

ショップ販売の小豆あんこ

3) ２月２０日（木）：チェンマイ

【王室プロジェクト財団：パン・ダ農業ステーション】

① 少数民族の農業に関して研究・普及（種子提供や技術援助）の面から

支援する組織で、台湾の小豆品種と日本のエリモ小豆との比較試験栽培に取り組んだ結果、適性品種と考えられた台湾小豆の普及に尽力しています（2015 年には 400t 程度生産）。

② 王室プロジェクトが農家から買い入れる小豆の価格は、今年が 30 バーツ（108 円）/kg で昨年度が 20 バーツ（72 円）/kg でした。

パンダ農業ステーションの外観

パンダ農業ステーションの小豆担当者

4) ２月２１日（火）：チェンマイ

【王室プロジェクト財団：農産物集出荷場】

① 当集出荷場は、王室プロジェクトで生産されたタイ北部地域の全ての生鮮農産物を集めて、選別・貯蔵・加工・包装・出荷を行う一大拠点であり、約 200 名のスタッフが従事しています。

② 残存農薬検査や農産物の調整・加工・包装に関する研究、有機堆肥生産や生分解性プラスチック容器の研究といった環境対策も実施しています。

王室プロジェクト集出荷場担当者との記念撮影

【民間豆類流通販売業者（LIMSAKDAKUL）】

① 当該業者は、農作物の加工・販売と輸出を業務としており、現在では選別等の施設のために 64,000 ㎡の敷地を有しています。

② 最近、日本の業者がこの地域の農家から小豆を買ったことがありましたが、自らが求める品質に達せずに困っていたため、その小豆を購入

したこともあるそうです。

③ 竹小豆については、タイ北部全体で凡そ 5,000t ほどの収穫量があり、当社がそのうち 1,000t ほどを購入しているとのことでした。

雑豆の入った巨大サイロ

倉庫に積まれた袋入りのインゲン等雑豆

４．調査後の感想

(1) タイの豆類生産の概要

タイの農業は基本的には米作が中心であり、近年ではさらに豆類からトウモロコシ等の収益性の高い作物への変換が急速に進んでいます。これは、豆類生産の収益性が劣ることと、大規模流通業者等が作目転換を積極的に誘導していることが関係していると思われます。

しかしながら、タイ農業の持続的発展という観点からは、輪作体系の中に豆類を組み入れて、適切な地力保全を図っていくことが重要と考えられること、そもそも小豆や竹小豆はタイ北部の山岳部の気候条件が適していること等を考慮すると、行政サイドと王室プロジェクトが連携して小豆等雑豆の生産振興を進めることは意義のあることと思われます。

かつてタイ北部地域では、今以上に小豆栽培が行われていたようであり、日本にもかつては 300t～400t 程度輸入されていた時期があったこと等を考えますと、日本への小豆等雑豆の輸入先確保の可能性を探ってみることも無意味ではないと思われます。

いずれにせよタイにおける小豆等雑豆の潜在的な供給力を考慮しますと、今後ともタイにおける小豆等雑豆生産・流通等に係る情勢に注目を続けることは重要と思われます。